

劇症型溶血性レンサ球菌感染症

劇症型溶血性レンサ球菌感染症は感染症法で定められている五類感染症全数把握の対象疾患です。

1987年に米国で最初に報告され、日本では1992年に初めての症例が報告されています。最近5年間では、全国で毎年100人前後の患者の報告があり、埼玉県では、2006年から2010年までに28人の患者報告がありました(図1)。この感染症の主な原因菌はA群レンサ球菌ですが、近年ではB群、C群、G群レンサ球菌による症例も報告されています。

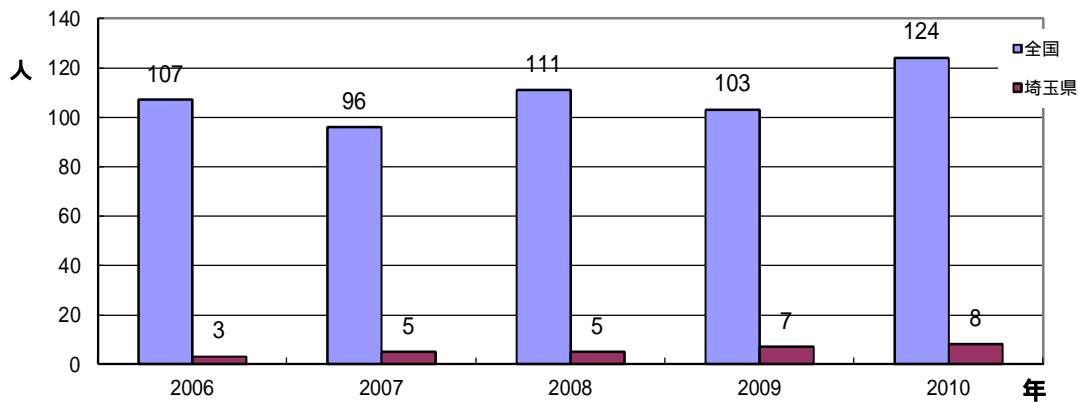


図1 患者数の推移 (2006年-2010年)

劇症型溶血性レンサ球菌感染症は、四肢の疼痛から始まり数十時間内に急性腎不全、手足の壊死、それに伴うショック、多臓器不全などを併発し、死亡率は約40%と報告されています。感染部位の皮膚や筋肉に壊死が認められることから、かつて「人食いバクテリア」と呼ばれ騒がれました。患者は、子供から大人まで広範囲の年齢層に発症しますが、特に30歳以上の大人に多く、男女の差はないといわれています。

2006年から2010年までに、当衛生研究所に11株の患者分離株が送付されました(表1)。レンサ球菌は、咽頭炎の原因として日常的に検出されますが、劇症化するメカニズムについてはまだ分かっておらず、研究が進められています。

表1 分離株の血清型(群) (2006年-2010年)

報告年	年齢	性別	血清群	血清型
2006	40~49	M	A群	T4
2006	50~59	M	A群	T1
2006	60~69	F	B群	Ib
2007	50~59	M	A群	型別不能
2007	30~39	M	A群	T22
2008	80歳以上	F	G群	
2009	10歳未満	M	A群	型別不能
2009	10歳未満	M	A群	T12
2010	50~59	F	A群	T1
2010	60~69	F	A群	型別不能
2010	10歳未満	F	A群	T1

国立感染症研究所では菌株を収集し病原因子の解析等の研究をおこなっています。衛生研究所が窓口となっていますので、ご協力を宜しくお願いいたします。